湊から港へ 新潟下町あるき
日和山登山のしおり

天保2(1831)年頃の日和山
長谷川雪旦「北国一覧写　出羽越後」(野内隆裕氏所蔵)より

下町あるきへ
ようこそ!

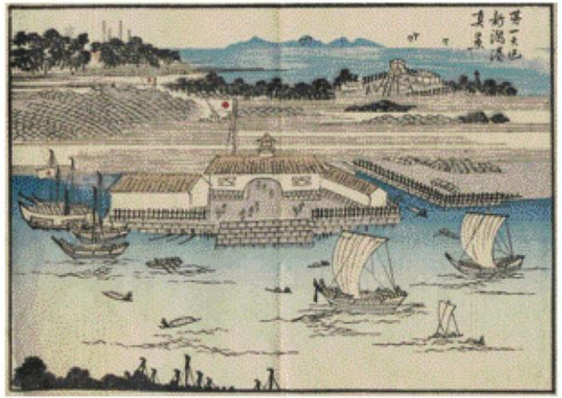
河口と港から下町名所、そして砂丘と海岸線へ。歩いて感じる新潟の町。

川と港と海に囲まれた新潟の町は、時代の移り変わりとともに大きく地形や町並が変化してきました。信濃川の河口方面の下町は、その影響を特に強くうけたエリアです。

江戸時代に名所として多くの人が訪れた「日和山」と、明治開港後交流の中心地となった「旧税関庁舎」。この2つのポイントを中心に下町を歩くと、そうした町の成り立ちや歴史を体験することができます。

ここで紹介する「日和山登山コース」は、新潟の町の大きな特徴である「砂丘の高低差」を足で感じながら歩くコースです。名所ではお宝解説板も要チェック。歴史と出会う新潟下町あるきへ、どうぞおでかけください。

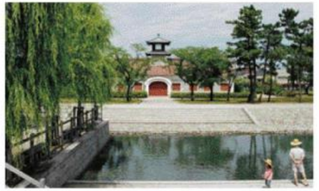
お宝解説板は
こちら!
設置場所は
右の地図で!



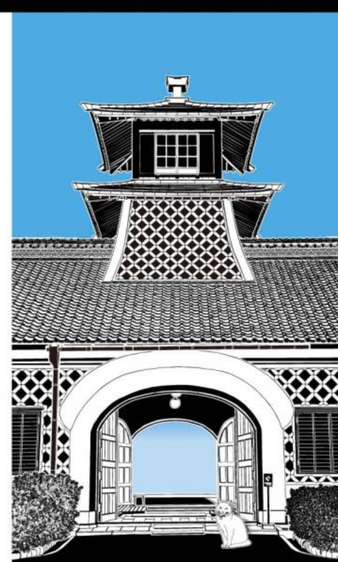
「新潟県下　越後橋誌」明治10(1877)年より。手前が税関、その右奥に明治13年に大火で消失する前の日和山が見えます。

湊から港へ
日和山登山ルート

信濃川河口にある「みなとぴあ」。開港新潟の玄関口であった「旧税関庁舎」の門をくぐって登山ルートがはじまります。開港と時を重ねるように変化してきた下町の、みなとに関連のある名所をめぐりながら砂丘の坂道をのぼり、海岸線へ。意外なほど起伏に富んだルートは、新潟の町の特性や形成の歴史を感じさせてくれるでしょう。



旧税関庁舎の前の水辺は、かつての信濃川のほとりを再現したものです。当時はここから荷揚げが行われていました。



新潟下町あるき　日和山登山のしおり

新潟市中央区 みなとぴあ〜新潟下町 界隈

まちあるきの際には、近隣の方や通行する方のご迷惑にならないよう、節度ある行動をお願いいたします。

〈見方・使い方〉
折りたたんでページをめくるように見てください。
裏も同じように真ん中で折り返し、たたんでください。

●イラスト・写真:野内隆裕
@にいがたなじらねっと　http://www.najiranet.com
●デザイン・本文:上田浩子@オフィスカイ
●協力:新潟市歴史博物館　みなとぴあ
●制作協力:roji-ren niigata

新潟市
企画制作 新潟市
新潟市中央区学校町通1番町602-1　TEL.025-228-1000

※無断転載・複製を禁じます。

2010.3 初版発行　2010.5.第2刷発行

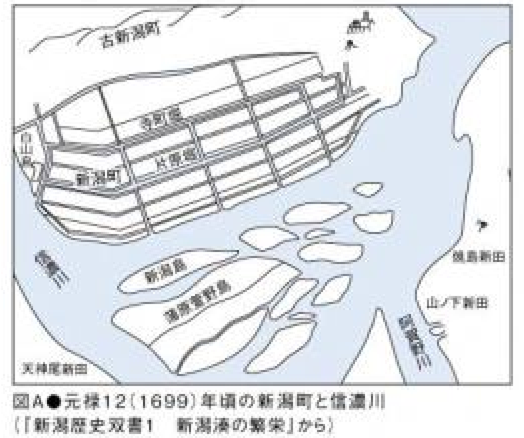
新潟町の変遷

地形の変化で生まれた新しい町

町並みのはじまり

江戸時代のはじめ、新潟町は今より海岸寄り（現在の寄居町、旭町、大畑周辺）に位置していました（古新潟町）。しかし阿賀野川と信濃川が合流して湊が浅くなって使えなくなったため川に近い場所へ町を移転、明暦元（1655）年にはその工事がほぼ完了しました。このときできたのが現在の新潟町です。当時は上（かみ）が白山神社境内地、下（しも）が洲崎町（古町通13番町辺り）まで、幅は現在の上大川前通から西堀通までの間でした。

移転した町には、川と海から運ばれる荷を運搬・取引するため、信濃川の流れに沿う南北方向に寺町堀（西堀）・片原堀（東堀）と「通り」、これらに直交する東西方向に5本の「横堀」と多くの「小路」が設けられました。



図A●元禄12（1699）年頃の新潟町と信濃川（『新潟歴史双書1　新潟湊の繁栄』から）

幕末・明治初めの資料をもとにした新潟町の鳥瞰図（新潟市歴史博物館みなとぴあ展示物）。南北に「堀」や「通り」が、東西方向に「小路」がのびています。また、現在と同じ場所（西堀通）に位置している寺町の海方向に砂丘が広がり、町の河口側に下町を見ることができます。

新しい町の誕生と発展

1. 伸びた「河口」

信濃川の河口は、川によって運ばれる土砂の堆積によって東に移動し、町はずれの洲崎町から河口までの距離は毎年伸びていきました。また、信濃川左岸には砂州や中州が寄り付いていきます。町のはずれだった洲崎町は古洲崎町とよばれるようになり、龍照寺（横七番町通1）の前が新洲崎町となります。この周辺は後に「新地（しんち）」ともよばれました。

延享2（1745）年には願随寺（元祝町）が、宝暦10（1780）年には長音寺（夕栄町）が建立されます。藩は寺に広大な土地を周囲に与えましたが、この土地を町人が借りて住み、新しい町ができました。

川村修就の砂防林工事のなごりは日和山共同墓地周辺でも見ることができます。

2.「島」の開発

信濃川左岸の新潟町側に寄り付いた砂州や中州は「島」とよばれる新しい土地になり、さまざまに開発されていきます。

元文元（1736）年、長老格の寺山彦左衛門が長岡藩から広小路向かいの島内に敷地を与えられました。邸内に毘沙門天を祀っていたので、彦左衛門の家を中心とする一帯は「毘沙門島」とよばれ（現在の南毘沙門町、北毘沙門町、相生町、芳町）、後に新潟の歓楽街の一つとなります。

宝暦8（1758）年には、飢饉による不況の対策として新洲崎町近くの「下島」「上島」の開墾が始まります。「榛島（はんのきじま）」（現在の礎町）にはナシが多く植えられたため、「梨島（なしじま）」ともよばれました。

現在の毘沙門島周辺

下島周辺（下島公園）

榛島周辺（礎町近辺）

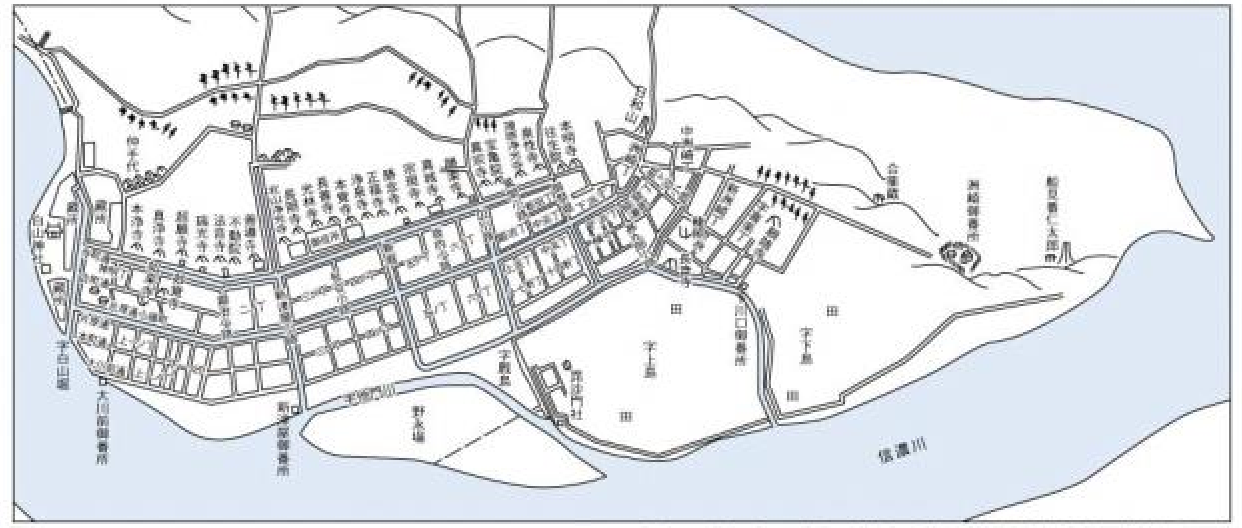
3.「砂丘」と砂防事業

一方、海岸側では土砂の堆積が砂丘を増やし、海岸線もまた次第に伸びていきました。新潟町の人々は信濃川寄りの土地を「浜手」、砂丘がある海岸寄りを「山手」とよんだそうです。嘉永年間（1848〜54）、仲役所の手代たちが寄居村から土地を借り山手側に家を建てます。ここは高台で、最初に朝日があたるので「朝日町」と名付けられました。現在の旭町の始まりです。

砂丘は深刻な飛砂被害も生みました。新潟町の砂防林事業は元和3（1617）年の長岡藩主・堀直寄の植林がはじまりとされています。初代新潟奉行の川村修就（ながたか）も砂防林工事を継続し、天保15（1844）年に日和山から願随寺付近に松苗を植え付けさせました。これは砂防とともに、新たに利用できる土地の拡大も意図して行われたものです。

上から龍照寺、願随寺、長音寺

図B●享和元（1801）年頃の新潟町（『新潟市史　通史編2』から）



図C●慶応2（1866）年の新潟町の町名と小路名（『新潟市史　資料編2』から）

新潟開港

時代とともに拡大し変化する町

開港と町の拡大

嘉永7（1854）年、日米和親条約の締結により日本の鎖国体制は終わりを告げ、安政5（1858）年の修好通商条約で新潟は開港場の一つとしてあげられます。明治元（1868）年、新政府が新潟の開港を布告。翌年「新潟運上所（うんじょうしょ）」（のち税関に名称を変更）が建設され、これを機に明治初期の町の改造が始まりました。

新潟県は「厩島（うまやじま）」「上島」「下島」など運上所周辺の低湿地や砂丘地を有力者に分譲し、開発をさせます（早川町、本間町、山田町、窪田町、忠蔵町、船見町、入船町などは買い受けた人にちなんだ町名）。「上島」は運上所と大川前通を結ぶ湊町通を軸とした街区、「下島」は川沿いに伸びる道路と熊谷小路（横七番町）を軸にした街区が地図上でできます。しかし実際の開発は遅れ、厩島や湊町付近以外に家が建つのは明治末以降でした。

一方、「秣島」「榛島」は楠本県令の主導の下、開化の町の規範として宅地化が進みました。このときできたのが「礎町通り」、もう1本の通りに面した町は「雪町」「花町」「月町」と命名されます。島の周囲には他門川に沿った「新島町通り」と信濃川に沿った「下大川前通り」が作られ、これらを軸にした町割が実施されました。

「新潟湊之真景」（井上文昌画）に蒸気船来航が描かれています。
※みなとぴあ所蔵：詳細は中面「願随寺」参照

明治初年の新潟税関。手前は鮮下川にかかる青柳橋。

図D●明治22（1889）年の地図（野内隆裕氏所蔵）。島部分が現在の地形に近づき、町がきれいに区画されています。

築港へむけて

1. 灯台と「水戸教（みときょう）」

明治2（1869）年、沖ノ口番所跡地に最初の灯台が、同10（1877）年、船見町2丁目に2代目の灯台が設置されます。同14（1881）年に3代目が、大正14（1925）年には突堤先端に4代目が設置されました。

沖合いの船の案内は灯台ですが、信濃川の河口である新潟港には、危険な瀬を避けて船を誘導し出航も先導する「水戸教」という水先案内が必要でした。江戸時代に回船問屋から委託をうけた伊藤仁太郎は長くこの任につき、新潟港が近代的な港になるまで伊藤家がこの重要な役割を果たし続けました。

初代の灯台　3代目の灯台　4代目の灯台　水戸教公園（雲雀町）

2.信濃川と河口の工事

新潟港は流砂の堆積や川筋の移動、冬の波浪などの悪条件が重なっていました。明治19（1886）年、信濃川の流れを良くして洪水を防止する河身改修工事と、河口に突堤を築く堤防改築工事が起工されます。

同29（1896）年、信濃川河口部を整理する信濃川流末改修工事が始まり、同36（1903）年に竣工しました。同40（1907）年、大河津分水工事の関連工事として、信濃川河口の改修工事が始まります。12年にわたったこの工事で、西突堤の新築と上流1180mの護岸工事、西突堤先端の灯台設置、河口の浚渫工事が実施されました。

3.変わる町並み

明治の末、「上島」（多門川と鮮下川、信濃川に囲まれた地域）には住宅や商店が密集するようになり、「下島」（窪田町、浮洲町、元島町から東、鮮下川の北の地域）には新潟鉄工所入舟工場、新潟瓦斯会社の工場が建設され、小さな工場や住宅も税関から河口へ伸びる道路に沿って建ち始めました。

また、田中町から大畑、南浜、東中通、旭町方面の砂丘と西堀の寺の間の地域には一方で屋敷が並び、一方で長屋が建つ地域となります。こうして旧来の町の周囲に新しい町並が拡大していきました。

昭和12（1937）年頃の新潟市（日本海大博覧会事務局「新潟市鳥瞰図」吉田初三郎画、野内隆裕氏所蔵）

日和山登山ルート

歩いて知るみなと今昔

みなとびあから日和山まで、まちなかの高低差を楽しむプチ登山です。下町を中心にしたルートには、みなとに縁のあるみどころスポットがたくさんあります。

新潟市歴史博物館
みなとぴあ
旧新潟税関庁舎
中央区柳町
重要文化財

みなとぴあの旧税関庁舎は、新潟港の「運上所」(後の新潟税関)として明治2(1869)年に建てられました。西洋建築をまねて新潟の大工が造った建物は、アーチの入り口や鎧戸を模した下見板の窓、なまこ壁などが印象的です。開港5港の税関の建物として唯一現存しているもので、国の重要文化財に指定されています。この門の先の湊町通りは当時「運上所道(うんじょうしょみち)」と呼ばれ、市も開かれていました。

「新潟税関之図」(新潟県立図書館所蔵)

2代目市庁舎

博物館本館
中央区柳島町2

明治44(1911)年に竣工した、2代目の市庁舎(現在のNEXT21の場所にありました)をモデルとしています。「あまのぐぶり」、「大船絵馬」の復元・再現品などの展示や、さまざまな企画展が随時開催されています。

第四銀行住吉町支店

旧第四銀行住吉町支店
中央区柳島町2

昭和2(1927)年に竣工した、第四銀行住吉町支店を移築・復原した建物です。外観の列柱や営業室の吹き抜けなどが近代銀行建築の特徴をあらわしています。現在1FはレストランB、2Fは会議室になっています。

明治初年の湊町通り。道幅を示す杭と電信柱がたち、家も建ち始めています。

解説板を見るとその場で確認できまーす。

河口間近の信濃川は、ときどき潮の香りもします。対岸は朱鷺メッセ。

湊町通り(昔の運上所道)をぬけて「浅草観音堂」へ。明治時代、港の安全を祈願するため東京の浅草寺から観音さまが分身され、開かれたお堂ですのニャ。

さ、そろそろ出発ですわよ。スタートは河口から。昔、港から荷物を運んだ道を行きますのニャー!

享保元(1716)年創立とされている「湊稲荷神社」。この神社には、台座の上の像を回すことのできる「願懸け高麗犬」があります。港が賑わっていた昔、船乗りが遊びに来ることを願う町の女たちは、西風が吹いて船が足止めされるよう高麗犬の頭を西に向けたといいます。これが「高麗犬をまわして願懸けをする」ことに変化し、今に伝わっています。「下(しも)の新地の道楽稲荷」という唄はここからきているんですね。

湊稲荷神社
願懸け高麗犬(こまいぬ)
中央区稲荷町
新潟市指定文化財

願いはなんじゃ〜 オホホホホ〜

女の人は左、男の人は右の高麗犬を回してな〜

願いを込めて

しっかり回せ!

白山神社(一番堀通町)の拝殿には、嘉永5(1852)年に水原の豪商・市島次郎吉正光が奉納した「大船絵馬」(新潟県指定文化財)が掲げられています。越後各地から集まる年貢米を大型のベザイ船に積み込み、江戸と大坂へ運ぶようすが描かれた大きな絵馬ですが、その一番下に「湊稲荷神社」を見ることができます。港に入った船はこの神社の森を目当てにしたといわれ、今も海運・漁業関係者の信仰を集めています。みなとぴあの歴史博物館には、この「大船絵馬」を復元・複製したもの(左)が展示されています。

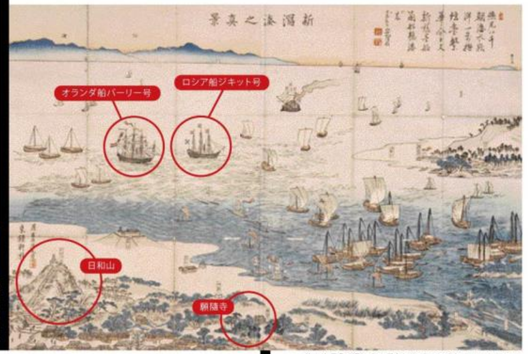
湊稲荷神社の解説板にはこんなことが書かれてますニャー。

金刀比羅神社
難船彫刻絵馬
中央区寄合町
新潟市指定文化財

安政5(1858)年、幕府はアメリカ・オランダ・イギリス・フランス・ロシアの5カ国と修好通商条約を締結し、新潟は函館・横浜・長崎・神戸とともに開港場の一つとしてあげられました。

翌年の安政6(1859)年4月22日、ロシア蒸気船ジギット号が調査のために来航します。乗組員は港内の水深を測量した後、流作場新田と山の下新田、新潟町に上陸しました。新潟の人々がヨーロッパ人と接したのは、これがはじめてのことでした。翌23日にはオランダ蒸気船パーリー号が来航し、画家の井上文昌(1818〜1863)は、「新潟湊之真景」(1859)で2日間にわたるようすを1枚の絵に描いています。

「願隨寺」は来航した外国人を応接する場所となり、新潟の最初の対外交渉の玄関口の役目を果たしました。



井上文昌「新潟湊之真景」安政6(1859)年(みなとぴあ所蔵)

願隨寺
中央区元税町

「難船彫刻絵馬」。こんな絵になっていました! 荒波とスーパーマンみたいな金刀比羅大権現さんにご注目。迫力満点、かっこいいです!(模写作成:野内隆裕氏)

文政4(1821)年、大阪から新潟へ向かっていた北前船「白山丸」が難破しそうになったとき、金刀比羅大権現が現れ船を救いました。この霊験に感謝した白山丸の船主、鈴木彌五左エ門(やござえもん)が建立したと伝えられているのが、寄合町の「金刀比羅神社」です。拝殿には船が救われる瞬間を表現した「難船彫刻絵馬」が掲げられています。

開運稲荷神社
中央区四ッ屋町3

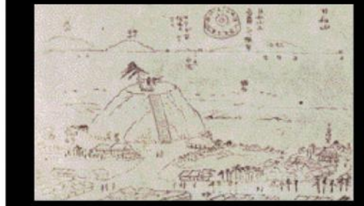
「開運稲荷神社」は、慶安2(1649)年に長岡藩の蔵所(米蔵)の守り神として祀られたのがはじまりといいます。参道には「こんこん様」とよばれる一対の狐の石像がありますが、これは明治時代の初め、出雲国(島根県)の回船が船のおもりのために積んできた出雲石を狐の像にして奉納したものだといわれています。こんこん様の両足をなでた手を額にあてると、ご利益がいただけるのだとか。

そろそろ坂道が始まるぞ。登山の開始じゃ。

●新潟名所「日和山」

町の北端、洲崎町（現在の東堀通13番町）の高台「日和山」は、港に入る船の水先案内（水戸敎）を行う場所でした。

明治になると、新潟の町は次第に家並がのび、西洋風の建物も建ち始めます。日和山の高台はそんな景色を眺めるのにも都合がよく、人々の絶好の散策地となりました。眼下には新潟町の通りと堀、家々や寺の大屋根が整然と並び、そのむこうには信濃川に並ぶ船の帆柱や、対岸の沼垂の町。遠くには弥彦山や角田山、県境の山々、海には粟島と佐渡島が浮かんでいます。日和山の頂上には住吉神社とやぐらのほかに茶屋もあり、そんな町の眺めをのんびりと楽しむことができました。



長谷川雪旦の「北国一覧写 出羽越後」に収められた天保2（1831）年の日和山。頂上の松や遠めがねをのぞく人、沖の船、ふもとの茶屋と町などが描かれています。（野内隆裕氏所蔵）

大正期の日和山。かつてはこんなやぐらがありました。（「新潟名所絵葉書」より：野内隆裕氏所蔵）

日和山

中央区東堀通13番町

川村奉行が嘉永5（1852）年に作らせた新潟の風俗絵巻「鱈の手振り（あまのてぶり）」には、日和山の脇を通って浜へ向かう漁祭りの行列の楽しそうなようすが描かれています。（みなとぴあ歴史博物館所蔵）

みなとまちの象徴といえる方角石は、白山神社や鳳公園などでモチーフに使われています。小路案内板や誘導サインなどにもついているので、探してみてください。

日和山は2009年に改修工事が行われました。周囲のようすはすっかり変わりましたが、頂上から町並を眺めると、砂丘の隆起や町の広がりを感じることができます。

●日和山と新日和山

ところが、明治13（1880）年8月の大火で日和山頂上の住吉社と茶屋、やぐらが消失してしまいます。このため、翌14（1881）年に日和山よりも北の砂丘の上に日和見の場所を移すことになりました。これが「新日和山」です。新しいやぐらと茶店が建てられた新日和山は、新潟で一番見晴らしが良い場所としてたくさんの人でにぎわいました。尾崎紅葉、北原白秋などの文人も訪れたそうです。

その後、海岸浸食によって新日和山は削られ、昭和11（1936）年、少し後退した現在の場所（中央区西船見町）に高さ7.2メートルの「日和山展望台」が建てられました。今の展望台は昭和52（1977）年に完成した2代目で、高さは9メートルあります。

日和山から新日和山方面の眺め。（「新潟名所絵葉書」より：野内隆裕氏所蔵）
手前に日和山共同墓地、砂丘の向こうは日本海。右は2008年に同じ位置から撮ったもの。

日和山からの新潟港方面の眺め。（「新潟名所絵葉書」より：野内隆裕氏所蔵）
手前は本町通14番町。右は2008年に同じ位置から撮ったもの。

3枚とも新日和山の絵はがき。真ん中の写真の楕円の中は、初代日和山展望台。（すべて「新潟名所絵葉書」より：野内隆裕氏所蔵）

砂丘の高低差をあるく日和山登山、いかがでしたニャ？ 新潟の町の特徴が感じられましたかニャー。右は現在の日和山展望台とそこから見た海岸線。歩いたあとに見ると、また格別な景色ですニャー。

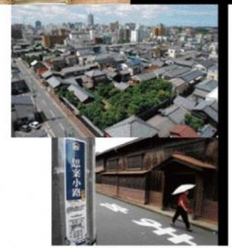
本町通の市場

田畑のほとんどない新潟町では市はなくてはならないもので、新津屋小路では年間を通して毎朝野菜や魚類を売る朝市が開かれていました。文化9（1812）年頃には、御祭堀に入る船で運ばれた野菜などを商う市が御祭堀の下手（現在本町通12・13番町）でも立つようになり、「北市場」と呼ばれました。現在の下本町市場のはじまりです。

明治後半、市場はますますにぎわいを増します。大正3（1914）年には本町通5・6番町の「南市場」に330人、「北市場」に280人ほどが出店していたそうです。ほかにも、湊町通周辺の「運上所市」、西覗島周辺や古町通で開かれた、露店商の「夜市」などがありました。昭和になると、交通網や商業施設などの変化によって市は少しずつ縮小されていきます。

本町下市場近くにある「あけぼの公園」。大正元（1911）年に湊小学校が古町通13番町移転した跡地にできた、新潟で3番目の公園だよ。ボクがいるから探してね。

上大川前通の回船問屋



江戸時代、回船問屋の大店のほとんどは大川前通（現在の上大川前通）や本町通に店を構え、暮らしていました。下本町の市場から魅力的な小路を抜けて上大川前通に出ると、今も残る回船問屋の建物や古い町屋などを見ることができます。港のにぎわいとともに歴史を刻んで来た町並は、人の暮らしの昔と今を穏やかにつないでいるようです。

大正期のこんぴら通りの絵葉書（野内隆裕氏所蔵）

「島」の変化

他門川を挟んだ島、「覗島」と「梨島（林島、棲島）」は、それぞれに町並が変化しました（図BC）。

上：西覗島町の金刀比羅神社
右：現在のこんぴら通り

磯公園

上左：報時塔
上右：現在の大円寺公園
左：磯町通

●覗島の夜市

「西覗島町」にも、海上安全の守護神「金刀比羅神社」（中央区西覗島）があり、「島のこんぴら様」と呼ばれています。この神社の収蔵庫には、船主や船頭たちが航海の安全を祈願して奉納した北前船の模型が今も大切におさめられています。

西覗島町の通りは「こんぴら通り」とよばれ、明治30年代から大正にかけて、「夜市」や映画館など庶民の楽しみの場としてたいへんにぎわいました。

●梨島の街区整備

「梨島」と呼ばれた磯町周辺は、楠本県令の指示のもとにお屋敷町として開発が進められ、広い道路が通されていました。磯町通はその時できた道路です。大正12（1924）年には、白山公園に次ぐ新潟で2番目の公園として磯公園（中央区磯町通6）が整備されます。同じ年には皇太子の結婚記念として、大円寺堀跡地（現在の大円寺公園・中央区磯町通4・5、下大川前通4・5にまたがる場所）に「報時塔」も建ちました。時代の変化は、町をさまざまに変化させながらかたちづくっています。